

推進委員長賞

本当の笑顔 千登世橋中学校 石田 世羅

「社会を明るくする運動」という言葉を聞いて、私はまず自分の教室を見渡しました。そこには一見すると笑顔があふれる楽しい日常があります。しかし、その笑顔の裏側に、誰かの我慢や孤立が隠れているのではないか。そう考えた時、私たちの身近にある「いじり」や「ノリによる仲間外れ」という問題が社会全体が抱える「孤立」という課題と深くつながっている事に気づきました。社会をより良くするために必要なのは誰かを排除して作る偽りの明るさではなく、一人一人の存在を認め合う本当の温かさではないでしょうか。

中学に入学して新しい生活が始まると、クラスでは自然と「ノリ」というものが形作られていきます。特定の誰かの失敗を笑いの種にしたり、欠点を茶化したりする「いじり」が、コミュニケーションの一環として行われるようになります。仕掛ける側は「ただの冗談だ」と言い、周囲もそれに合わせて笑います。いじられている本人でさえ、その場の空気を壊さないように、無理をして笑って見せる事があります。しかしその笑顔の裏側にある傷つきに、私たちはどれほど想像力を働かせているのでしょうか。

かつて、私の友人がこの「ノリ」の対象になった事がありました。最初は小さいいじりでしたが、次第にエスカレートし、彼女が何かを言うたびに周囲が冷ややかな反応を見せるような、実質的な「ハブリ」の状態になっていきました。彼女は次第に元気を失い学校を休みがちになりました。その時、周囲から聞こえてきたのは「あいつはノリが悪い」という無責任な言葉でした。私はこの言葉を聞いた時、強い違和感と恐怖を覚えました。集団のノリに合わせられない人を「異物」として遠ざけ、その責任を排除された側に押し付ける。この「排除の論理」は、形を変えれば、一度過ちを犯してしまった人を社会から冷遇し、居場所を奪い、結果として再び犯罪へと追い込んでしまう社会の冷たさと、本質的に同じではないでしょうか。

犯罪や非行に走る人の背景を調べてみると、そこには共通して自分の居場所がないという絶望感があるといえます。法務省の資料などでも、更生に必要なのは仕事や住所だけでなく、自分を受け入れてくれる「人とのつながり」が不可欠であると強調されています。しかし今の社会はどうでしょうか。一度レールを外れた人に対し、「自分たちの平穏を乱す存在だ」として目を逸らし、社会の輪から締め出そうとする風潮があります。教室で起きている「いじり」や「ハブリ」はまさにそのような社会の縮図であるように私には見えてきました。

では、私たちはどうすればこの負の連鎖を断ち切り、社会を明るくする事ができるのでしょうか。私は「多数派のノリ」に流されるのをやめ、個人の「痛み」に寄り添う勇気を持つべきだと考えます。私は休みがちになった友人の家を訪ね、「あのいじりはひどかったよね」と、自分の気持ちを正直に伝えました。クラス全体の空気を一気に変えることは難しくても、少なくとも私はあなたの友達であり、味方であるという事を意思表示として伝えたかったのです。その後彼女は少しずつ登校できるようになりました。彼女を救ったのは、立派なアドバイスではなく、「あなたの味方だからね」という一人の理解者の存在に私はなれたのかなと思いました。

更生保護の現場でも人を立ち直らせる最大の力は「自分を信じてくれる他者の存在」だと言われています。私たちが教室で安易な笑いに加担せず、孤立している誰かに温かな眼差しを向けること。将来誰か

がつまづいた時に、その手を離さずに支え合える寛容な社会を耕すことにつながるはずです。もちろん、犯罪を許してはいけませんし、集団のルールを守る事も大切です。しかしその「調和」が誰かの犠牲の上に成り立つものであってはならないと思います。犯罪を犯さない。非行に走らない。それは単に法律を守ることだけではなく、他人の尊厳を傷つける「ノリ」を拒絶し、誰もが「ここに居てもいいんだ」と思える場所を守る事ではないでしょうか。

結びに、私は「冷たい空気」に流されない人間であり続けます。誰かを笑いものにして成り立つ明るさではなく、誰もが自分らしくいられる「本当の笑顔」をこの教室から作っていきたいです。社会を良くする事は決して遠い世界の話ではありません。友人の心に想像力を働かせ、一言「おはよう」と声をかける事からはじまります。そんな小さな心の「灯火」が重なり合った時、社会は今よりもずっと温かく、誰もが何度でもやり直せる場所になると私は思っています。